

軽防協ニュース速報 号外

2007年7月2日

軽種馬防疫協議会 事務局

(JRA 馬事部防疫課)

フランスにおける馬ウイルス性動脈炎 (EVA) の発生

—International collating centre からの中間報告 (2007.6.)—

ウール地方における発生

種馬場で胚移植に供用中のフランス乗用馬が、発熱、呼吸器症状および浮腫を含む臨床症状を呈し、(同馬が出産した) 3日齢の子馬は死亡した。成馬の鼻咽頭スワブおよび子馬の様々な組織を研究所における検査に委ねたところ、PCR検査によって馬動脈炎ウイルス (EAV) と同定された。

Val de Reuil のフランス国立種馬技術センターでは、ペルシュロン種牡馬から人工授精した牝馬も、発熱の症状を示している。

オルヌ地方における発生

以前より発熱および精巢炎を呈しており、心筋炎で死亡したペルシュロン種牡馬について、その剖検時に採取した組織 (精巢、肝臓および脾臓) から PCR 検査によって EAV が同定された。同時に *Streptococcus zooepidemicus* も分離された。

別のペルシュロンの種馬場では、生後4日齢の子馬が EVA と一致した臨床症状を呈した後、死亡した。EAV は、剖検時に採取した組織の PCR によって確認された。

3カ所目の施設では、ペルシュロンの牝馬が5月24日より発熱と浮腫の臨床症状を呈した。この牝馬は前述の死亡した種牡馬の精液を使用して5月18日に人工授精を受けていた。さらに、その牝馬の子馬は、6月24日より EVA と一致した臨床症状を呈している。

EVA の診断は6月25日に確認され、上述のものを含む2007年4月以降のいくつかの症例について相互の関連性が疫学調査によっては直ちに明らかされた。子馬の死亡例は3~4日齢に限られており、1~2ヵ月齢の子馬は広範囲の包皮浮腫を含む臨床症状を示し、症状が継続中のものもあるが生存している。症例の原因および分離された EAV の系統を解明するために調査が継続されている。フランス国立種馬場において、ペルシュロン種牡馬は地理的に分離された場所にあり、サラブレッド種牡馬と一切接触していない。

規制措置

規制措置として、Val de Reuil の技術センターの馬は隔離されている。疑いのある種牡馬は、EVA に関する正確な状況が確認されるまで、種付けを停止している。現在、最初の種牡馬が死亡した種馬場のすべての種牡馬に対して血清学的かつウイルス学的 (精液の培養と PCR 検査) 解析が実施されている。疑わしい種牡馬と種付けあるいは人工授精をした牝馬、もしくは疑わしい牝馬と接触した馬に対して隔離と検査を履行するよう生産者に注意喚起を行った。消毒剤の使用を強く推奨している。